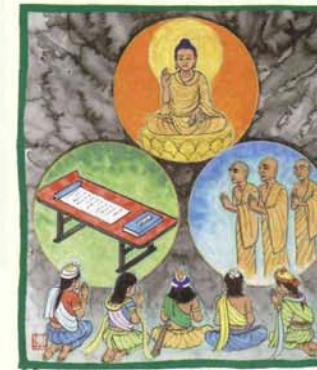


さで、この吉田胎内が発見され、北口から富士登拝を行う講社は、中の茶屋から吉田胎内へ寄り、山頂を目指すというコースをたどるようになつた。この胎内の祀官を勤めていたのが御師・梅谷家である。梅谷家は屋号を「梅谷」(けいわく)といふ。梅谷、代々が梅谷監物、梅谷上総介を名乗つてゐた。現在残る梅谷家の系譜は梅谷秀秋を初代とし

北口本宮富士浅間神社の境内に、  
神官が献饌し、神社祭式  
に乗つ取つた祭事が行わ  
れる。その後、富士講の  
人々による「お焚き上げ」  
が行われる。これは、か  
つて行われていた祭事を復活したという位置づけ  
になる。「お焚き上げ」  
は塩を盛つた火壇の上に、  
線香を山形にして並べ、  
これに火をつけて「焚き

の意義づけと、それを開基した講社のあり方、そして、管理する祀官、および御師団との関連性、さらには、その祭事に参加する人々と、いずれをとっても欠くことの出来ない関係性が見える。このバランスが崩れること、が、行事の簡素化、さらには消滅を意味するのである。

三宝に帰依する事が仏教徒



絵・橋本豊

## 信仰と伝承 ——吉田胎内祭

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

先回までは、解脱会の開祖・岡野聖憲について記した。これは、岡野聖憲の生家・岡野家が富士信仰の家であり、解脱会そのものが「修驗實証」をうたう宗派であることから、「富士信仰の派生<sup>はいしん</sup>」という視点でこれを概観してみると何を試みたわけである。そして、ここまで富士信仰の歴史的な流れについて、人物伝を中心にして現代まで見てきたわけであるが、今回から富士信仰の行事について触れておく。その上で、あらためて現行行事の歴史的意義づけを行い、現在に残る姿を記録として留めておきたいと考える。

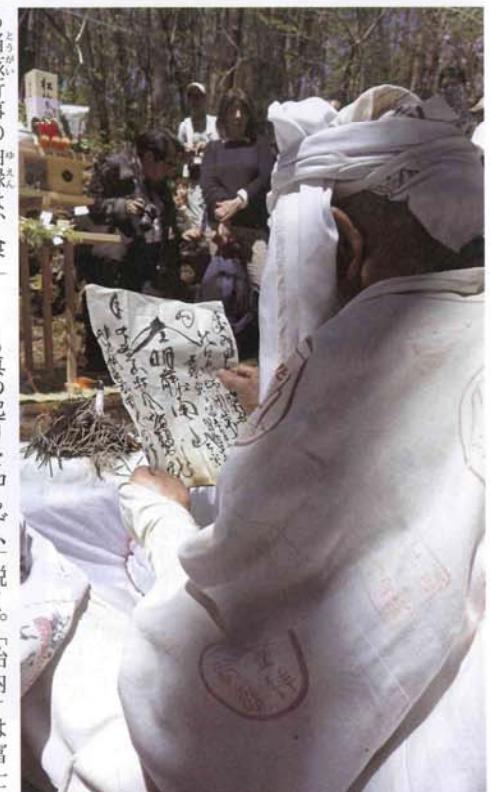
管掌者によつて三つに区分した。一つ目は神社が管掌するもの、二つ目は御師団が管掌するものの富士講が管掌するものである。一般に富士講行事と呼ばれるものは、三つめの行事を指す。しかし、行事は講社ごとに独自性を持ち、すべての行事は信仰として富士山に帰結するため、三者の行事には自ずと関連性が生まれる。そうした関連性に着目しながら、年間行事を通覧することで富士信仰の立体的なあり方を見てみたい。

る当該行事の由縁は、食  
行身禄の残した『三十二  
日之卷』の七月十一日条  
にみることができる（引用  
用は『富士講の歴史』所  
収の「三十二日之卷」を用  
いた。便宜を図り、句  
読点を施した）。

裾野の内吉田村より  
一合ほど登り、水の  
入り丸桶と云ふ所に  
女の胎内の形あり。  
是人間出生母の胎内  
を印し置也。今以て  
母の乳房通ずる事絶  
ゆる事なし。信心の  
者参詣するといへど

も真の起りを知らず  
ただ名所の拝所とばかり見あやまる也。  
仍て末世に及び母の乳通せぬ時に御胎より洩る処の露をいたぐに、その身に通る事顯然なりかくの如く有難き所よく伝え聞すべし。

説く。「胎内」は富士山の火山活動が生み出した溶岩洞窟の一種である。溶岩が冷え固まる際、洞窟内部に形成された模様が、さながら人の胎内の様であることから通称される。安産や乳の出しに靈験あらたかとされ、洞窟内に染み出る水滴を手拭いにもらい受けてこれを産婦に飲ませると、乳の出が良いとされる。富士信仰が民衆宗教として成り立つ要素の一つでもある、「信仰の靈験」が民衆に寄り添う面がうかが



吉田胎内でのお焚き上げ